

島尾敏雄

続
日の移ろい

中公文庫

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

続日の移ろい

中公文庫 ©1989

一九八九年一月二五日印刷
一九八九年二月一〇日発行

著者 島尾敏雄

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷

カバー トープロ

用紙 本州製紙

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

ISBN4-12-201667-3

Printed in Japan

中公文庫

続 日の移ろい

島尾敏雄著



中央公論社

目次

続日の移ろい

昭和四十八年四月一日から同年十一月一日迄

5

後書

483

解説

菅野昭正

487

続
日
の
移
ろ
い

四月一日

日直も宿直も廃止と決まった最初の今日がたまたま日曜日にあたったから、いきなりその実施結果がためしみられることになった。日曜日と祝祭日は休館と決められていても、これまでならその日は昼も夜も六人の職員が割りふりをして日宿直を分担し、いつも誰かが図書館に詰めていた。それ故に七百坪ほどの周囲の人家から隔絶された構内であつても、庭の片隅の住宅に住む私たち家族だけでなしに、図書館の広い建物の中の宿直室には深夜でもいつも誰かが泊まっているのだという安心があつて、きもちを力強く支えることもできた。しかし日宿直が廃止となれば、夜も昼も休館日の構内には私の家族のほかには誰もいないことになる。それはちよつとたまらない寂しさだ。どうして私のからだにこう寂寥が侵入してくるのかわからないが。内心私は日宿直の廃止をおそれ

たが、敢えてそれを阻止するきもちにはなれなかった。

ところが今日も誰かが詰めている様子なので、確かめに行ったら、がらんとした事務室に求さんがひとり居た。為残した仕事を超過勤務で埋めているのだと言っていた。とにかく私はほっとする思いがあった。いずれにせよ日宿直廃止という事実には緩衝がはいったことになったのだから。

実は朝食のあと私はベッドで眠っていたが、昼食をすませてからもしばらくはうつらうつらした。

目が覚めると妻と伸三とマヤが百人一首をしている。妻が言いだしてはじめてにちがいないとしても今頃なぜかた取りなどやる気になったのか。すすめられるままに私も加わったが、それがおもしろいと思ったからではない。頭を空にして何も考えず、手足やからだを動かしていたと思っていたようだ。もっともかるた取りではそれほどからだを動かすことにはならないが、それでも相手の持ち札を目がけて手を伸ばすときの動きは、若かった。かつての正月の日の他人が入りまざってのにぎやかな興奮を思い起こさせて、いくらかのはずみが甦るのを覚えたのだった。

三回ばかりもつづけて遊ぶとかるた取りにも厭きて、四人は庭に出て雑草むしりをした。

青一色の空の中をちぎれた白い雲が流れて行く。

夜になると夜中をわがもの顔にイチュバネガタが鳴いていた。よく耳をすますと、そのひっきりなしのやかましい鳴き声の底に別の静かに澄んだ蛙の鳴き声が断続的に聞こえていた。果たして蛙かどうか確かなことはわからないが、私は蛙だと思いこんでいる。のどのところの白い肉が微妙に振動している様子さえ目に見えるようだ。しかしもしかしたらこおろぎに似た虫が鳴いていたのかもしれない。堅い木の実の乾いた殻をこすり合わせるような、しかもどこかやわらかく胸にしびこんでくる鳴き声で、にぎやかなイチュバネガタの鳴き声を無視するかのようになり、ひっそりと、しかし確かな音律をかなでていた。

部屋の中にかけた寒暖計は摂氏の二十五度を示している。

四月二日

夜中にマヤがしきりに咳をし、いかにも苦しそうだったが、明けがたには収まったようだ。マヤは風邪をひきやすい。否風邪というのでもなく、すぐ咳に襲われる。その咳はなかなかたち切れないが、熱を出して寝込むというふうではない。マヤはその苦しさを訴えようとはしないから、私はつい馴れっこになって、あれはマヤの痼疾だからその

うちに収まる、と傍観している具合だ。しかしのどをしぼりむきになっているように聞こえるその咳き込みは、私の胸をちくちく刺す。

朝方うぐいすがすぐそばの庭に来て鳴いていた。

外に出ると天候は雨模様。空は鼠色で覆われ、しめった風が吹いている。ふと昔の何か、天候が或る状態を示した時に起きた出来事の気配が思い出され、充実した感情が湧いて消えた。はっきりその出来事を思い出したのではないが、にほいのような気配が私を包んだ。雲が動き、湿気を含んだ風が流れる度に、その気配が私の心とからだをつかまえそしてよぎって行く。

夕方の五時には図書館を退いてN鍼灸療院に行った。Nさんの問わず語りによると、警視庁に勤務していた頃のことだが、柔道の練習中にあやまって目を打ち、失明に近い状態になったのだという。それを十五年かかってやっと直したが、そのために警官の職はやめて、鍼灸の道に転じたのだそうだ。

四月三日

マヤの咳がいくらか下火になったように思える。しかし腰と背骨が痛いといっている

から、妻を付き添わせ県立病院に見せにやったが、突発事故の怪我人の手術のために診察は中止になったといつて帰つて来た。

四月四日

空一面に鼠色の雲がすきまなく覆い、雨が降っている。

八時半頃に、妻はマヤを伴なつて県立病院に出かけて行つた。帰つて来たのは昼もとつくに過ぎた頃だ。痛みの箇所は腰や背中、骨ではなくて筋肉だったという。

四月五日

妻はマヤを連れて今日も病院に出かけた。

おだやかなよい天気だ。外の日差しはあかるく、風がないから、ぽかぽかといかにも春らしい陽気だ。どこかからやわらかな気分の音楽が聞こえてくると、ふと東京か神戸の郊外の住宅地帯にでも居るような錯覚を覚えた。山ぎわのあたりで遊んでいる子どもらの声も聞こえ、確かな日常の手ざわりのような午後があった。窓越しに差し込んでくる西日に背中をあてているととけるような快さを感じた。本を読むといらいらしてくるから読書はしないほうがいいのかもしいない。

夕方かかってきたSさんからの電話で、彼の娘さんが急に盲腸の手術をしなければな

らなくなつて、七日の船には乗れなくなつたから悪しからずと知らせてきた。休みの度にマヤの帰学の時の船の座席の確保が容易ではなく、いつも悩まされているが、今度は早目にS夫人がその娘といっしょにマヤを連れて行ってくれる約束ができてほつとしていたところだった。いささかあわて気味に前後の船便をしらべてみると、「ひかり」が今夜七時頃に離島から入港して八時には鹿児島に向かつて出港する予定だとわかつた。六日には船便はない。予定していた七日の船で行くと実は始業には間に合わないことになる。S夫人が行けないとなると今夜の船でたてたほうがよさそうだ。もちろん特二の切符は買えないが。そう決まると四人がかりであわただしく準備をしてとにかく港に行つてみた。埠頭のくらがりの中で既に乗船客が列をなして並んでいた。妻はその列の中から純心学園の制服を着けた一人の生徒をいち早く探し出し、マヤと一緒に連れて行つてくれるようにたのんでいた。幸いにマヤのことを知つてもいたし、娘むすめした大柄な少女で、応対もはきはし、たのもしい感じで安心できた。とても元気そうに見えるたのに、盲腸の手術をして二週間がたったばかりだと言つていたが、跡が痛まないのかとひとごとながら気がかりであつた。乗船の際大混乱を来たすことはわかつていたので、まず妻と伸三が列につづいて船室にはいり、座席を確保して置いて一人が知らせに出てくるといふ手筈をきめた。そのあいだ私とマヤとその少女は列を離れた埠頭で待機しているわけだ。やがて乗船が開始されると案の定船内にわれがちにはいろいろとする人のた

めに列は崩されてしまった。妻と伸三がとにかく揉まれるようにタラップをあがって行った。しばらくして妻が舷門のところに出て来て、席が取れたと合図していた。私たちが三人はタラップをあがって船内にはいったが、乗客が多いために臨時に開放された二等船室の場所が妻にはわからなくなっていささかあわてたのだった。妻はうろろ行きつ戻りつしてその場所への連絡を思い出そうと試み、落ちついて落ちついて、などと私も口では言いながら、うわのそらでこれは厄介なことになったと弱り切ってしまったが、妻のあとにつづくほかはなかった。おまけに狭い通路は往来する乗客でごった返し、思うようには歩けなかったのだ。しかし動顛の中での無我夢中の行為には思わず知らずギヤの噛み合う状態が突然にあらわれたりするものだ。どちらが舳先か鱸かさえわからなくなつてでたらめに歩き廻っているうち、ひょいとその部屋の前に出たのだ。どうしてあんな部屋が用意されていたものか。それほど広くもない隠れ部屋のような奥まった袋部屋が、まだそれほど乗客が詰め込まれぬ状態で、目のまえにあらわれたのだ。伸三が無然とした様子で確保した場所に坐っていた。そこはちよつと昔の船底の三等船室と似たあんばいであつた。妻はもつといい場所を探してくるなどと言っていたが、それはとどまらせた。出港までにそんな余裕があるはずはない。みんな何か落としたものをしたように言葉や行為に欠落を感じながら、あわてていて何だかからだじゅうがどきどきし、不安がひょいと首を出してきそうであつた。マヤ、大丈夫かと念押しという言葉もそこ

そこに、連れになつてもらつた生徒にも言い足りぬきもちを残しながら、妻と伸三を促してその部屋を出たのだった。帰りはうそのようにすぐ出入口の所に出られたのだが、既に鉄の扉は締められてしまつていた。舷門のほうに行く余裕はなく、しまつた！と立ち往生のかたちになつたけれど、近くに居たボーイが二人ほどすぐ寄つてきて、鉄扉の締め具を手ぎわよくゆるめてあけてくれたのだ。早く降りてくれないと危険だというような小言を耳にしながら、まだ離岸がはじまつていなかった船体から岸壁に飛びおろることができた。まことに危機一髪のところであつた。船はすぐ離岸して、埠頭とおいだに暗い海が広がつた。

興奮のあとでしばらくはからだが小さきみにふるえるようであつた。危険は至るところに口をあけて待っているのだと思つた。そこをよくも落ちこまずに除けてこられたものだ。しかしそれは全く偶然のことではないということが、私を気味悪い思いにさせた。そのほてりをさますつもりで三人はしばらく歩いて、中央通りのあたりに来たところでようやくタクシーをひろつて帰つた。あわてて出て行つてしまつたマヤの面影は家の中のあちこちに残つていた。今夜一晩は波にゆられなければならないことがいかにも可哀相な気がした。おそい夕食のあとすぐには寝つけそうもなく、妻と伸三と三人は夜中までもあれこれと話しこんでしまつた。伸三が家に帰っていると私は力強い思いを蓄えていることができる。しかし伸三だけでなく妻からもマヤからも力を引き出さなければ

ばなるまい。妻と伸三は四畳半に、私は六畳のベッドで眠った。

四月六日

強くなつてほしい、と私に妻が繰り返して言う。伸三には彼が帰省してからオトウサンが目に見えてよくなったから、夏休みにも早く帰ってくるようにと言いきかせている。ちよつと落ちつかぬきもちに傾いてきたので、私は図書館の構内を早足で歩きまわることにした。そんなことで効くとも思えないが、じつとしているより多少とも気はまぎれる。すると図書館の門前の道のまんなかにビニール袋からはみ出した腐ったなま塵芥が落ちてゐるのが目についた。暗いうちに遠くから運んできてそこにわざと散らかしたように見えた。またなんだかいつもの庭の景色と違うなと思つたら、児童室の前のゴムの木の大方の枝が切り落とされて丸坊主になつてゐることに気づいた。へんにくすぶつた憤怒が胸のあたりにいらいと湧いてきた。宿直が無くなったこととそれはかかわりがあるのか。職員たちは塵芥車が落として行つたのではないかと言つていたが。外出から帰つてきた補佐が、昨夕ゴムの木の枝をもらいにきた男がいたが、こんなに早く切りにくとは思ひもよらなかつたと言つていた。それにたとえ切りにきてもあらためて職員立ち会ひのもとで切らせるつもりだつたとつけ加えていた。誰も気づかぬうちに切つて行つたとなると、いつ来たのだらう。その場所は私の住宅からまともに見えるところな